

# 学内広報

2015.5.25

no.146



## 濱田総長時代の6年間を導いた指針

# 「行動シナリオ」の成果

FOREST  
2015



### 1. 学術の多様性の確保と卓越性の追求

国内の主要研究大学との連携体制（**学術研究懇談会（RU11）**）を構築。研究大学に対する学術研究支援のあり方や、間接経費率の引き上げ、基盤的経費の削減停止・充実を求める提言等を取りまとめ。

**国際高等研究所**を設立、傘下の機構として**数物連携宇宙研究機構（IPMU）**、**サステイナビリティ学連携研究機構（IR3S）**を附置。

世界トップレベル距離 鹿ベレレ 丘 着 藪鹿麗ヤV 森古策 曼子 真 樹花火ヨ殺蛋 ヨ殺蛟イネニヨ ヤ口静楯めレニ藤 ヨ殺蛋 ヨ殺蛟 ヨキラ古木ワ' 限趙 æ

濱田純一第29代総長のもとで2010年3月に策定された将来構想「東京大学の行動シナリオ FOREST2015」は、我々教職員が活動する際の確かな指針となってきました。公表からまる5年。そのシナリオはどれだけ実行されたのでしょうか。ここで、「行動シナリオ」に沿ってこれまで全学で実行してきた取組みの数々を、10の重点テーマ別に確認してしっかりと振り返り、始まったばかりの新しい6年間の準備を整えることといたしましょう。

## 5. 教員の教育力の向上、活力の維持

「東京大学のファカルティ・ディベロップメント(FD)の基本方針」を策定。

新任教員のためのファカルティ・ハンドブックを作成。

FDに関するポータルサイト「東大FD.COM」を構築、教職員向けFDビデオの制作。

教員評価の制度設計と適切な運用。

教員の業績に関する情報公開の推進。

大学教員を希望する大学院学生を対象に、授業力向上を目指すための「フューチャーファカルティプログラム」を実施。

## FOREST2015

2009年4月、総長に就任した私は、6年間の任期中における大学運営の基本姿勢として、「森を動かす。世界を担う知の拠点へ」と題する所信を公にしました。高度で多様に富む東京大学の知の営みを鬱蒼とした森に譬えながら、国立大学法人化の精神と仕組みを踏まえてさらに大きく発展させていく決意を述べたのです。この「森を動かす」という言葉には、個々の部分にとどまらず全体の構造改革を目指したいという思いを込めました。そして、2015年3月に至る私の任期中に、何を指し、何を行おうとしているのかを明らかにするために作成したものが、それが『行動シナリオ』です。

2010年4月にこの『行動シナリオ』を公表して以降、学内外の幅広い理解と協力の下、2015年に向けた「行動シナリオ」の具体化を図りつつ、進捗状況を適時に検証し、計画-実施-評価-対処（PDCA）のサイクルを稼働させていくことを通じ、その目標を最大限達成できるよう、毎年度のフォローアップを実施してきました。10項目の重点テーマにわたる全250に近い取組事項に関して、一つ一つエビデンスに基づき進捗状況を点検し、成果や効果のあった取組、改善・充実すべき取組などの検証を経て、シナリオの最終ゴールに向けての具体的な対処を決定し、それらについて、執行部はもとより、全学で共有するという作業です。

私の総長任期が満了する2014年度は、「重点テーマ別行動シナリオ」の最終的な達成状況のフォローアップを行い、「部局別行動シナリオ」の達成状況とあわせて、その結果を報告書として取りまとめました。本報告書は、2015年度以降の東京大学の在り方の検討等に資するため、いわば「東京大学全体としての自己点検・評価報告書」として学内外に広く公表するものです。

研究に関しては、国際高等研究所の拡充、リサーチ・アドミニストレーター（URA）の積極的導入による研究支援体制の充実など、国際的競争力を持つ卓越した研究のための環境整備を推進してきました。東京大学の国際的評価のさらなる向上に向けては、大型プロジェクト等の支援に一層努めるとともに、国際的な研究ネットワークを強化しつつ戦略的な学術推進支援体制の充実が必要です。

教育に関しては、これまで、PEAK（Programs in English at Komaba）を含め、英語のみで学位を取得することができるコースの拡充、FLY Program（初年次長期自主活動プログラム）の創設、学部学生の体験活動の推進、多様な学生構成の実現と学部教育のさらなる活性化を目指した推薦入試導入の決定など、様々な改革を推進してきました。特に、平成25年度に役員会決定とした「学部教育の総合的改革に関する実施方針」に基づき、「教育の国際化」、「教育の実質化」、「教育の高度化」という3つの柱に沿って「よりグローバルでよりタフな」人材を育成するため、4ターム制導入に向けた全学的準備を進めてきました。これは、学事暦というまさしく大きな枠組みを変えることになりました。この4月からは4ターム制やカリキュラム改革、推薦入試の導入を始めとする新しい制度がスタートします。今後はさらに大学院改革につなげるなど本格的な展開が期待されます。

大規模公開オンライン講座への参加など「知の共創」を掲げた社会連携活動、戦略的な国際連携への取組、教員組織の活性化に向けた新たな人事制度の創設、事業等の見直しや経費節減による効率的な管理運営など進み、『行動シナリオ』の実現に向けた数々の取組が着実に実を結びつつあることを実感しています。

学生の国際的な流動性の強化など教育のグローバル化への歩みは大きく進みはじまりましたが、留学生や外国教員の増加など、グローバル・キャンパスの形成、学生・教員構成の多様化の実現に向けては、まだ途上にあります。特に、男女共同参画、女性の活躍推進への取組みの遅れについては、女子学生や女性教員の増加、女性管理職の積極登用などについての抜本的な対策が必要と考えています。大学としての将来の競争力を高めるうえで、多様性のメリットを十分に活用することは大きなアドバンテージとなり得るはずですが。

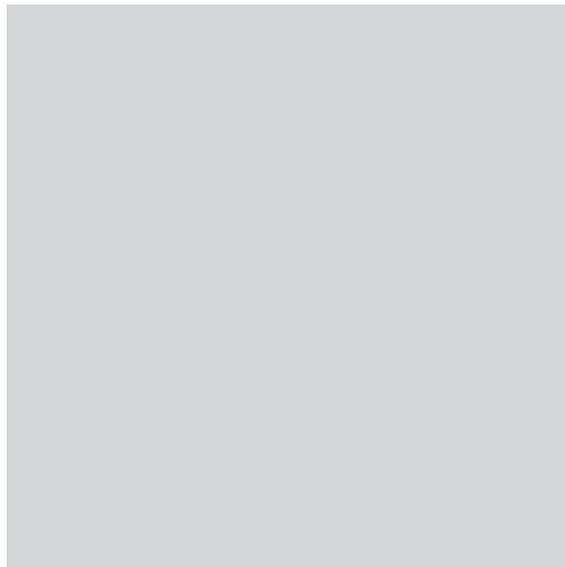
また、コンプライアンスに関しては、研究倫理の問題が少なからず明らかになっていることをきわめて重く受け止めています。再発防止のため、「高い研究倫理の精神風土」を本学にお

いて揺ぎないものとするとともに、URA制度のさらなる整備など、研究体制の組織的改革も進める必要があります。研究倫理の確立なしに社会的な信頼の維持・回復は図れません。

2011年、東日本大震災に関する救援・復興活動の推進について、その重要性と継続的に進めること必要性を明示するため、新たに10番目の重点テーマとして設定しました。被災地の本格的な復興までには依然として課題が山積しています。東京大学としては、復興への継続的支援の重要性を再確認しつつ、引き続き、学生の体験活動や教員の専門性を生かしながら、被災地のニーズに即した支援を推進しなければなりません。

世界的な大学間競争が激化する中で、教育力と研究力のさらなる向上を通じて、東京大学の存在意義や価値を確固たるものとし、豊かな構想力を備えた「世界を担う知の拠点」としての社会的使命を果たす。 音響計 音響計

4月17日(金)、伊藤国際学術研究センターにおいて



創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学のすべての構成員がぜひ知っておくべき教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんのレポートでお届けします。

## 持続可能な社会を創る人材の育成に向

教養教育高度化機構 環境エネルギー科学研究特別部門長  
先端科学技術研究センター

瀬川 治

に 網 環 羽 找 部 仰 停 楡

我が国の長期エネルギー需給見通し（いわゆるエネルギーミックス）に関する議論が、活発に進められている。東日本大震災に伴って起こった福島第一原子力発電所事故でエネルギー供給戦略に見直しが進められる一方、国連気候変動パリ会議（COP21）を控えて低炭素

進しが

起め

海

Q

Q

Q

東大  
なり  
強に  
てま

Q

協力

訂正とお  
しくは「

中川 健太郎

グローバルアントレプレナー

## 宵の明星とインタープリター

ここ数か月、夕暮れの西の空に一際輝いているモノがあるが、みなさんお気づきだろうか？ 宵の明星、金星である。ここで星と言わなかったのは、金星は惑星であり、星（恒星）ではないからだ。

私は観望会（星を見る会）に関わる機会がよくある（悪友たちに巻き込まれたというのが正確かもしれない）。星や宇宙を好きという人は多く、星柄・宇宙柄も含め何となく綺麗だから好きという人から、科学的なことに興味がある人まで、興味の対象は人それぞれである。そのような観望会参加者に「あれが金星ですよ」と伝え、「明るい」「綺麗」「ふーん」といった様々な反応が返ってくるが、中には「都内でも見えるのか！」「惑星が肉眼で見えるのか！」という人もいる。

都内で金星が見えることを知り、夜空を見上げながら帰っていく参加者。日常生活の中にほんの一端、



4月20

